

論文

在日ペルークラスとペルーでの視聴調査から ―描画に見られる文化の影響―

塚本 美恵子

【要旨】 映像は、子どもたちの理解を促す有効な教材として、近年、教育場面でも多用されつつある。子どもたちが映像をどのように記憶しているかをアニメ視聴後に描画で回答を求める調査を繰り返し行ったところ、アメリカの4割近い子どもたちが彼らの育ったアメリカ文化の影響を受けた visual image を保持していることがわかった。今回は同様の調査を、日本の南米系外国人学校のペルークラスとペルーの日系人学校、さらにペルーのインターナショナルスクールで実施した。その結果、子どもたちは彼らが学ぶ学校文化の影響を受けた visual image を保持していることがわかった。

【キーワード】 映像記憶、視聴調査、ペルーの子ども、visual image

1. はじめに

海外に出ると言葉がわからなくて困ることも多いが、飛行機の機内の安全説明などが映像で紹介されると、言葉がわからなくても何をすれば良いかが概ね理解できるようになる。外国語で放送されている現地のテレビ番組なども、映像を見れば大筋の内容が推測できることも多い。このように映像は言葉が理解できなくても内容が大まかに推測できる特性を持つことから、異文化間のコミュニケーションや相互理解に役立つツールとなる。筆者は映像のこうした特性に注目し、異文化間コミュニケーションにおける映像の有効性を検証するために日本での予備調査後にアメリカで視聴調査を開始した。日本語版のアニメを使用して繰り返し行った調査結果からはさまざまな点が明らかになったが、当初、予想していなかった結果、つまり、回答の中に映像を見たままではなく文化の影響を受けた visual image を描いている者がかなりいることが明らかになった（塚本 2013）。

今回は、映像視聴における文化の影響は日本で

学ぶ「世界につながる子どもたち」、その中でも特に日系ペルーの子どもたちに焦点を当て、彼らがアメリカの子どもたち同様、何らかの文化の影響を受けた visual image を保持しているのかどうか、またもし仮に保持しているのであればそれはどの程度か、を明らかにすることを目的に視聴調査を実施した。

2. 研究の背景

筆者はこれまで、子どもたちの映像記憶に見られる文化の影響を検討するために、日本での予備調査を皮切りにアメリカ、在日のブラジル人学校、ブラジルの日系人学校で調査を行ってきた。アメリカの日米バイリンガルプログラム実施校（A校）、スペイン語と英語のイマージョンプログラム校（B校）、特別な語学プログラムを実施していない私立校（C校）3校での調査結果から、子どもたちは言語が理解できなくても60%以上の高い注視度で映像を視聴していること、映像注視度パターンには共通の傾向がみられることなど、

映像が子どもたちの興味を喚起し、子どもたちには共通の関心領域があることが調査から確認できた。その一方で、実際に視聴した映像の“雪だるま”が2玉だったにもかかわらず、3玉の雪だるまを描いた子どもが複数見られた。その後の一連の調査から、子どもたちは映像を見たまま記憶しているのではなく、文化の影響を受けた visual image を記憶・再構成していることもわかった(塚本 2011)。

その後、A・B・C校の4年生全員に映像で見た雪だるまを描くように指示する追試調査を実施したところ、A校の25%、B校で39%、C校で42%の児童が3玉の雪だるまを描き、全体で4割近い子どもたちが見てもいない3玉の雪だるまを描いたことが明らかになった(塚本 2012a)。また4年生と5年生で比較検討したところ、4年生では3玉の雪だるまを描いた者が有意に多く、発達段階によっても変化することが示唆された(塚本 2012b)。

映像視聴に見られる文化の影響は、日本で学ぶ「外国につながる子どもたち」、その中でも最も数の多い日系ブラジル人児童生徒にも見られるのかを調べたところ、全員が2玉の雪だるまを描いていることがわかった(塚本 2014)。この結果と比較検討するために、国内のもう1校のブラジル人学校に加え、ブラジル本国の日系人学校5校で学ぶ子どもたちとの調査結果を比較したところ、ブラジル本国の日系人学校在籍の方が在日のブラジル人学校在籍者よりも有意に3玉の雪だるまを描いている者の割合が高いことがわかった(塚本 2015)。

そこで今回は、日本で学ぶ「外国につながる子どもたち」の中でも、ブラジル、中国、フィリピンに次いで多いペルーの子どもの子どもたちを対象に、彼らの映像視聴後の image に文化の影響が見られるかを明らかにするために調査を実施した。

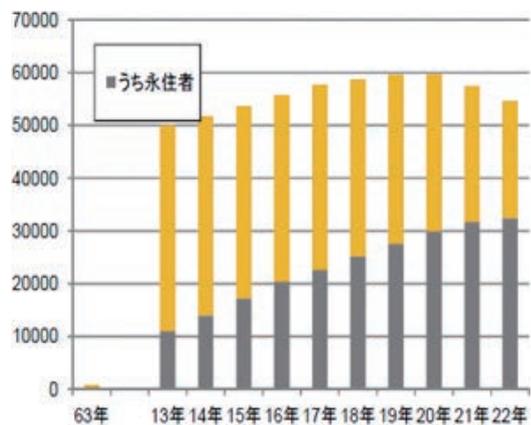
3. 日系ペルー人について

今回、視聴調査に協力を得たのは、日本にある南米系外国人学校ムンド・デ・アレグリア校のペルークラス、ペルーの首都リマにある日系人学校ラ・ビクトリア校、ペルー北部の都市トルヒーヨにあるインターナショナルスクールのフレミング・カレッジ校である。3つの学校については後述するが、まずはペルーの日系人についてその歴史から見ていこう。

ペルーは日本が中南米で最初に国交を結んだ国で、南米での最初の日本人移民先でもあり、移民の歴史は110年に及ぶ。現在、ペルーに暮らす日系人はおよそ9万人で、世界でもブラジル、米国に次ぐ第3位の規模の日系人社会が形成されている¹⁾。一方、日本に住むペルー人は、法務省の在留外国人統計によれば2014年6月の時点で48,263人²⁾で、その人数は中国64万人、韓国50万人、フィリピン21万人、ブラジル17万人、ベトナム8万人、アメリカ5万人に次ぐ7番目に多い国となっている。内閣府定住外国人施策推進室HP³⁾の資料(表1)によれば、在留のペルー人総数は減少傾向にあるが、永住者は増加傾向にあることがわかる。

ペルーの日系人はブラジルの日系人と同じよう

表1. 外国人登録者数の推移(ペルー)



内閣府定住外国人施策推進室 HP 資料7より

に捉えられているが、アルベルト松本（2014）によれば、両者はさまざまな点で異なるという。在日ペルー人とブラジル人の特徴を比較すると、(1)ペルー人はブラジル人ほど一つの団地や地区に極端に集住している様子が伺えない、(2)里帰りについては予想したほど本国に帰っていない、(3)ペルー人の定住指向は、90年代の後半には半分近くがその在留資格を有していた（ブラジル人の場合は3割未満）ことを挙げ、以下のようにまとめている。

同じ日系人でも、当然その出身国の歴史、文化、言語、社会構造、政治情勢等が大きく影響し、その特徴が日本でも何らかの形で表現されている。来日の経緯が「デカセギ」であっても、ペルーの場合は経済的な要因にテロや治安悪化という要素が加わり切羽詰まった状況で日本にやってきた。また、一部の日系人には、政治不安と恐怖が脳裏に深く刻まれており、本国が経済的に多少よくなっても社会構造や政治の仕組みはそう簡単に変わらないという、従来の不信感は未だにある。楽観視できない事情が日本に留まらせたのかもしれないし、本国に戻ってもまたゼロからやり直し、教育制度に不備が多いところで子どもたちを教育することにためらいがあったのも事実である。

他方ブラジルは、中南米の大国としてその規模や期待感是非常に高く、在日ブラジル人はその存在を誇らしげにアピールし、常にその懐に戻れるという「幻想」を抱いているのかもしれない。しかし、実態はもっと複雑で、経済成長とともに物価上昇への対応と高い競争率が要求され、本国に戻っても自身の社会に再適応することは容易ではない。

ブラジル人子弟の不就学率は改善しつつあるが、それでも地区によっては3~4割に及んでいるようだ。ペルー人にもドロップアウトのケースはあり、結局未就学になっている児童や生徒はいるようだが、1割程度という試算もある。

このようにペルーの日系人はブラジルの日系人と同じように見られているが、実態はなかり大き

く異なるようである。

4. 調査方法

実際に視聴調査を実施してデータを収集し、母国ペルーの子どもたちと比較検討する方法をとった。今回調査対象としたのは、①日本の南米系外国人学校に在籍する児童で、比較のために、②ペルーの日系人学校在籍者、さらにアメリカとの比較を行うために、③インターナショナルスクール在籍者を対象とした。

ここでは、(1) 調査対象校、(2) 利用映像、(3) 視聴調査の方法、(4) 調査時期と対象人数、(5) 分析方法、の順に説明する。

4.1. 調査対象校

4.1.1. ムンド・デ・アレグリア校ペルークラス

今回、調査に協力を得たのは、浜松にある学校法人ムンド・デ・アレグリア校ペルークラスである。ムンド・デ・アレグリア校⁴⁾は、浜松の大手自動車メーカーの日系人採用担当兼通訳の仕事をしていた松本雅美氏が、日系の親たちの要望をかなえるために在日ペルー人向けの学校として2003年に設立した。当初は13名の児童で開校したが、その後ボリビアやアルゼンチンなどの南米系の国の子どもたちも受け入れ、2005年からはブラジルクラスも設けて受け入れている。ペルー



図1. ムンド・デ・アレグリア校の入る建物

クラスでは、教授言語はスペイン語で、ペルー政府公認の学校としてペルー本国の教育課程に従って政府公認のテキストを使用し、卒業するとペルー政府から卒業資格が得られる。ムンド・デアレグリア校は、「教育に国境はありません」を教育理念とし、松本校長のもと、ペルー人教師、ブラジル人教師、日本語教師が教育にあたっており、教科は、算数、理科、社会、母国語、日本語、美術、体育等の科目があり、ペルーとブラジルの通信教育(テスト)を取り入れている。ペルークラスは幼稚園4、5歳、小学部6歳から12歳、中学部13歳から17歳となっている。ペルーの教育制度は、小学校6年、中学校5年のため、ムンド校を卒業後にペルーの大学には進学可能だが、ペルー人の子どもが日本の大学に行くには、文部科学省の“準備課程教育”を1年受講する必要があるが、日本の大学への進学実績もあるという。

4.1.2. ラ・ビクトリア校

南米ペルーの首都リマにあるラ・ビクトリア校は日系住民が中心となって戦後の1948年に開校した代表的な日系人学校で⁵⁾、2012年3月には閑静な大通りに面した3階建ての新校舎に移転した⁶⁾。新校舎は外からは中の様子は全く見えないが、中へ入ると、広々とした空間が広がり、教室を出れば廊下から中庭と青空を見ることができ開放的な雰囲気となっている。筆者が訪れた際には日本語で「こんにちは」と明るく挨拶をしてく



図2. ラ・ビクトリア校校舎

れる子どもたちもいた。日系児童の割合は60%を占め、日本からの日系ペルーの帰国子女の重要な受け皿となっている。教授言語はスペイン語となっているが、日本語の授業は日本語教師5名が担当し、週に4コマ設けられている⁷⁾。

4.1.3. フレミング・カレッジ校

ペルー北部の都市トルヒーヨにある Fleming College⁸⁾は、名称に The British International School of Trujillo, Peru とあるように1990年創立のインターナショナルスクールである。生徒数は2歳から17歳までの約720名で、授業の大半は英語で行われており、教員も職員室では英語とスペイン語を話していた。今回の視聴調査のコーディネーターを務めてくれた教師は、アメリカの大学でMAを取得後に帰国し、この学校の英語担当教師として赴任した。フレミング・カレッジ校では朝8時から始まり、8時半から40分ごとの授業が行われ、英語は週に5時間配置されている。大半の授業は英語で行われているが、それでも今回の調査で筆者が持参した映像に英語版とスペイン語版があると知った子どもたちは、口々にスペイン語での上映を希望していたことから英語よりも母語の方が分かりやすいと感じたのだろう。



図3. フレミング・カレッジ校校舎



図4. 『雪渡り』の1シーン© サイブラス

4.2. 利用映像

視聴調査に使用した映像は、日本の(株)ハリケーンフィルムズ(現/株式会社サイブラス)が制作した『雪渡り』の日本語版(日本未公開)と、英語版とスペイン語版『Crossing the Snow』(Schlessinger Media)である。宮沢賢治の『雪わたり』を原作とする本作品は、人間の子どもたちが不思議の森に住むキツネたちの主催する幻灯会に招待されて相互の信頼関係を築く内容で、作品はイギリスの放送局S4Cが主催したAnimated Tales of the Worldシリーズの一つとして日本で制作され、すでに海外の多くのテレビ局から放送された質の高い作品である。今回の調査対象とした「雪だるま」のシーンは、約13分の作品の中で主人公たちが森へ行き、キツネたちが作った「雪だるま」を見つける物語の鍵となるシーンである。映像で提示された雪だるまを図4に示す。

4.3. 視聴調査の方法

各校での視聴調査では、1回目は日本語版で行った。調査の手順としては、まず、日本のアニメを視聴してもらうことを授業担当者からムンド校とビクトリア校ではスペイン語で、またフレミング校では英語で説明し、日本語版の視聴後に「今見た雪だるまを描いて下さい」と問い、ムンド校とビクトリア校ではスペイン語の質問紙、フレミング校では英語の質問紙に回答を求めた。2回目

の上映はムンド校とビクトリア校ではスペイン語版で、フレミング校では英語版で上映し質問紙に回答を求めた。質問は記名式で、質問項目は、他に理解度(自己申告)、最も印象に残ったシーンの回答等である。

4.4. 調査時期と対象人数

日本のムンド校での視聴調査は2014年3月に実施した。調査協力者はスペイン語クラスの小学校4年生4名、5年生2名、6年生3名、中学1年生2名、中学2年生2名、中学3年生1名、中学4年生3名、中学5年生4名の計21名である。

ベルーのビクトリア校での視聴調査は2014年9月に実施した。調査に協力してくれたのは、4年生27名、5年生26名、6年生31名の計84名である。

インターナショナル校フレミング校での視聴調査は2014年8月に実施した。調査対象者は4年生49名、5年生52名、6年生47名の計148名で、視聴調査後には、筆者による簡単な日本文化紹介とカタカナによる名前の書き方の授業を実施した。

4.5. 分析方法

分析方法は、視聴後に子どもたちが質問紙に描いた雪だるまの絵を分析の対象とした。子どもたちが描いた「雪だるま」の絵が図4のように2玉になっているか、図5のように3玉になっているか、あるいはそれ以外の絵が描かれているかによって「2玉」「3玉」「それ以外」に分類した。雪だるまに足がついている場合は「キツネ」と判定し、雪だるま以外のものが描かれている場合は「それ以外」とした。

5. 結果と考察

アニメ『雪渡り』で子どもたちが視聴した雪だるまは図4で示したように2段重ねの2玉であるが、今回も視聴し終わってから彼らが描いた雪だるまの中には、図5の例に示したような3段重ね

表2. 各校の雪だるまを2玉と3玉で描いた児童の割合

国	学校名	対象学年	2玉の人数	3玉の人数	その他	計
日本	外国人学校ムンド校	4年~中5	20 (95%)**	1 (4%)	0	21
ペルー	日系人学校ビクトリア校	4年~6年	66 (78%)*	9 (10%)*	9	84
	インターナショナルフレミング校	4年~6年	91 (61%)**	43 (29%)**	14	148

+p<.10 * p<.05 ** p<.01



図5. フレミング校女子が描いた雪だるま

の3玉のものが見られた。

今回の調査結果を表2にまとめた。

日本の南米系外国人学校ムンド校のペルークラスでは2玉の雪だるまを描いたのは20名(95%)、3玉の雪だるまを描いたのは1名(4%)、その他は1人もいなかった。

ペルーの日系人学校ビクトリア校の4年から6年生までの84名では、2玉の雪だるまを描いたのは66名(78%)で、3玉の雪だるまを描いたのは9名(10%)、その他は9名だった。

ペルーのインターナショナルスクールのフレミング校の4年から6年の148名では、2玉の雪だるまを描いたのは91名(61%)、3玉の雪だるまを描いたのは43名(29%)、それ以外は14名となっている。

2玉の雪だるまを描いた者を学校別に見ると、ムンド校で95%、ビクトリア校では78%、ペルーのインターナショナルスクールのフレミング校では61%の順に少なくなっている。一方、3玉の雪

だるまを描いた者の割合は、在日のペルークラスでは4%にしかすぎないが、ペルーの日系人学校ビクトリア校では10%と増加し、フレミング校では29%とさらに増加している。各校の2玉と3玉の雪だるまを描いた人数についてカイ二乗検定を行った結果、3つのグループの数値が有意だった(p<.01)。また残差分析の結果、日本のムンド校ペルークラスと在ペルービクトリア校では2玉の雪だるまを描いた者が有意に多く、ペルーのインターナショナルスクールフレミング校では有意に少なかった。

これまでアメリカで行ってきた調査では、3玉の雪だるまを描いた者の割合は前述したように、日本語バイリンガル校で約25%、スペイン語バイリンガル校で39%、モノリンガル私立校で47%といった数値が出ており、アメリカ文化の影響が強い学校の方が3玉と描く者の割合が高くなっている(2012a)。在日のブラジル人学校とブラジルの日系人学校の比較では、3玉の雪だるまを描いた者の割合は在日ブラジル人学校で3.9%、ブラジルの日系人学校では16%と、ブラジル日系人学校の在籍者の方が3玉の雪だるまを描いた者は有意に多かった(2015)。ブラジルでの結果を今回のペルーでの調査結果と比較すると、日本の南米系外国人学校ムンド校ペルークラスで3玉の雪だるまを描いた者の割合は4%で、在日のブラジル人学校の3.9%とかなり近い数値となっている。同様に南米にある日系人学校をブラジルとペルーで比較すると、3玉の雪だるまを描いた者の割合は、ブラジルでは16%あったのに対し、ペルーでは10%と低くなっている。

一方、ペルーのインターナショナルスクールでの調査からは、3玉の雪だるまを描いた者の割合は日系人学校の10%と比較しても29%と3倍近い数値となっており、アメリカでの調査結果の数値と近くなっている。

実は本調査を最初に行ったのは2011で、開始してから時間が経過していること、また2014年には映画『アナと雪の女王』が日本でも大ヒットし、この映画に「オラフ (Olaf)」と呼ばれる雪だるまのキャラクターも出ていたことから、日本の子どもたちの雪だるまのイメージが変化した可能性も考えられた。そこで再調査を2015から2016年に関東地方のK公立小学校で実施した。K小学校での調査は2015年12月から2016年1月にかけて、小学1年生38名、2年生39名、3年生29名、4年生28名、5年生36名、6年生41名の計211名の協力を得て実践した。この公立小学校には日系ブラジル児童が在籍していたが、雪だるまを3玉に描いた児童は皆無であった。この結果から、日本で育つ子どもたちはほぼ全員が雪だるまを2玉で描き、3玉で描く子どもは非常に少ないと言える。

先行研究のデータを参考に、今回のペルーでの視聴調査結果の考察として言えることは、在日の南米系外国人学校のペルークラスでは、彼らの生活している場である日本文化の影響を受けて2玉の雪だるまを描く児童が大多数であった。一方、ペルーの日系人学校では10%の児童が3玉の雪だるまを描いていたが、インターナショナルスクールでは3割近い子どもたちが3玉の雪だるまを描いたことから、日頃から英語圏の文化への接触度が高い場合は、アメリカ文化の影響を受けた3玉の雪だるまを描く者の割合が高く、その数値も先行研究で行ったアメリカの小学校での視聴調査の数値に近いことがわかった。

本視聴調査の結果はデータ数が少ないことから今後も検証を続ける必要があるが、今回のペルーでの調査結果からは、子どもたちは「育つ場」の文化の影響をうけた visual image を保持する傾

向があると言えよう。

注

- 1) 外務省ホームページ「わかる！国際情勢」ペルー～今も昔も日本人を惹きつける国（2009年 Vol. 26 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol26/>（2016-4-5 アクセス）
- 2) 法務省「平成26年6月末現在における在留外国人数について（確定値） http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00043.html（2016-3-10 アクセス）
- 3) 内閣府定住外国人施策推進室 HP 内閣府副大臣後藤斎平成24年5月24日（木）内閣総理大臣「日系定住外国人施策について」資料7 <http://www.8.cao.go.jp/teiju/index.html>（2016-4-1 アクセス）
- 4) ムンド・デ・アレグリア校ホームページ <http://www.mundodealegria.org/>（2016-4-10 アクセス）
- 5) 山脇千賀子 1999 ペルーにおける日系住民と教育 歴史的経緯と現状ラテンアメリカ・レポート Vol 16 No. 2 22-29
- 6) ペルー新報2012年2月2日記事より <http://www.perushimpo.com/noticias.php?idp=12228>（2016-2-10 アクセス）
- 7) 鳥羽美鈴 2012 ペルー社会における日本文化の伝承 関西学院大学 先端社会研究所紀要第8号 43-53
- 8) フレミング・カレッジ <http://www.fleming.edu.pe/>（2016-3-15 アクセス）

引用文献

アルベルト松本 2014 南米の日系人、日本のラティーノ日系人「在日ペルー人とブラジル人の違いとその共通点」 Discover Nikkei*/17

- Sep 2014 記事
<http://www.discovernikkei.org/en/journal/2014/09/17/nikkei-latino> (2016-2-22 アクセス)
- 塚本美恵子 2011 「アメリカの子どもたちは日本のアニメをどう記憶したか—子どもたちの描いた「雪だるま」からの一考察—」日本教育工学会講演論文集 p 811-812
- 塚本美恵子 2012a 「アメリカの児童は“雪だるま”をどう描いたか」異文化間教育学会第33回大会発表抄録 (pp 90-91)
- 塚本美恵子 2012b 「子どもの映像視聴に見られる文化の影響—発達段階による違い—」日本教育工学会研究報告集 JSET12-4 pp 147-150
- 塚本美恵子 2013 塚本美恵子編著『子どもたちは何を見ているのか—教育現場における映像教

材の活用—』デジタルパブリッシングサービス ISBN978-4-86143-090-9

- 塚本美恵子 2014 「ブラジル人学校の子どもたち映像をどう読み取っているか—「最も印象に残ったシーン」の分析から—」異文化間教育学会第35回大会発表抄録 p 164-165

- 塚本美恵子 2015 「ブラジルの子どもたちは雪だるまをどう描いたか—ブラジルの日系小学校での視聴調査から—」異文化間教育学会第36回大会発表抄録 pp 142-143

謝辞：本研究は、科学研究費助成事業の課題番号25350349 研究代表者 塚本美恵子「映像メディアの教育課題向上に関する研究」の助成を受けています。

**Comparing Peruvian Schools in Japan and Peru:
Cultural Influences on Children Drawing Snowmen
By Mieko Tsukamoto**

[Abstract] This study reports the result of an audio-visual survey conducted at a Peruvian school in Japan, a Japanese school in Peru, and also an International School in Peru. Following extensive audio-visual surveys in both Japan and northern California, the author found that about 40percent of the U.S. 4th graders drew 3-ball snowmen after watching a film portraying 2-ball snowmen, which supports the idea that children store visual images in their memory. Furthermore, the children were found to reconstruct images after watching the film not only using their immediate perception but also relying on cultural influences. A comparative study was done at a Peruvian school in Japan, a Japanese school in Peru, and an International School in Peru. The result showed that the proportion of children who drew images from immediate perceptions and those who drew images reconstructed from cultural influences indicated significant differences between those living in Japan and those living in Peru and moreover significant differences between those studying at a Japanese school and those studying at an International School in Peru.

[key word] comparative study, audio-visual survey, cultural influence, Peruvian children, visual memory